

Title	レトリックの転機：ハイナー・ミュラーの『モーゼル』におけるメタファー
Sub Title	Der Wendepunkt in der Rhetorik : Zur Verwendung der Metapher in Heiner Müllers „Mauser“
Author	平田, 栄一郎(Hirata, Eiichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.68, (1995. 5) ,p.134(93)- 147(80)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00680001-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

レトリックの転機

——ハイナー・ミュラーの『モーゼル』におけるメタファ——

平 田 栄一朗

0.

ブレヒトは観客を観客席から締め出した。しかもホールへの向こう側へではなく、舞台へである。この劇形態がブレヒトの「教育劇 (Lehrstück)」である。ブレヒトはこの劇形態によって、傍観するだけの観客に劇に参加してもらい、「舞台—観客席」のパラダイムを打破しようと試みた。したがって「教育劇」から学びうるのは、観客でなくそれを演じる者たちなのである。おのおのが劇体験を通じて学んだことを俎上にのせ、侃々諤々と議論をする。テーマは劇の芸術的内容についてよりも、市民に変革を促すための実践的な内容についてである。このような実践面重視のために、ブレヒトは「教育劇」にシンプルな二項対立の内容、簡潔簡明な言語表現を盛り込んだ。とりわけ彼の『処置 (Die Maßnahme)』(1930年)は、当時アクチュアルな問題であったマルクス主義革命における進歩とその犠牲という截然なる対立、抑制のきいた言語で異彩を放っている。それゆえに『処置』は作者の意思により上演されてこなかったにもかかわらず、多くの論者たちの議論を呼びおこしたのだった。

ハイナー・ミュラーが『処置』に着想を得て書いた『モーゼル (Mauser)』(1970年)も「教育劇」に属する。革命の進歩とその犠牲という二項対立を内容とし、観客に台詞の共同朗読などの舞台参加を促している⁽¹⁾からである。しかもミュラーはブレヒトの「教育劇」の形態を批判的に発展継承しようとした。⁽²⁾ブレヒトとの相違点として、二項対立をより尖鋭に、よりグロテスクにすることによりその矛盾を露呈させる内容がこれまで多く

指摘されてきた。⁽³⁾ だが相違点は内容面だけではない。ミュラーは表現方法も批判的に継承しようとした。ブレヒトの「教育劇」においては総じて劇内容をシンプルに語る表現方法が用いられているが、『モーゼル』では作品の要所にメタファーで彩られるのである。『モーゼル』におけるメタファーの綾は、明らかにブレヒトが『処理』で望んだ上演形態と抵触する。ブレヒトは『処理』を「表現ゆたかに」しないように指示したほどである。⁽⁴⁾ 表現過多が二項対立の内容を幻惑し、正しい認識にもとづいた議論を損ねることになるからである。しかし『モーゼル』のレトリックは二項対立の内容を幻惑するような隠蔽工作をしない。それどころか、ブレヒトの場合よりグロテスクになった二項対立を尖鋭にする。それはメタファーが暗示する内容によって鋭利にされるだけではない。メタファー自身にひそむ矛盾を剔抉することにより、二項対立の矛盾が尖鋭化されるのである。このように、矛盾をはらむメタファーの構造と、二項対立の内容との密接な関連がどのような様相を呈しているのかを、第1節および第2節で検討する。第3節では、1985年に書かれた詩にみられる、『モーゼル』と同一のメタファーを分析し、『モーゼル』のメタファーが、後期ミュラーの演劇テキストにおける文体上の変化を暗示する指標となっていることを、本論のまとめとしてつまびらかにしたい。

1.

『モーゼル』にちりばめられたいくつかのメタファーにおける白眉は、原文にしてわずか14ページのテキストに8回も反芻されるスローガンである。8回も繰り返されている以上、このメタファーは作品において重要な役割を担っているに違いない。それは、名詞や形容詞を組み合わせる句レベルでなく、以下のような文単位で成立するメタファーである。

Wissend, das tägliche Brot der Revolution
Ist der Tod ihrer Feinde, wissend, das Gras noch
Müssen wir ausreißen, damit es grün bleibt.⁽⁵⁾

革命の日々の糧が／革命の敵の死であることを知りつつ、草をまだ刈りとらねばならぬ／それを緑に保つために、ということを知りつつ

厳密に言えばスローガンの後半部「草をまだ刈りとらねばならぬ、それを緑に保つために」がメタファーである。その字義どおりの意味は、不鮮明であるゆえに、類似する意味内容をほのめかしている。このメタファーの暗示することはなにか、その答えを得るために、『モーゼル』のあらすじを確認しながら、メタファーの解釈のプロセスをたどってみよう。

『モーゼル』の舞台は軍事裁判である。革命の党により殺人のかどで告訴された刑事Aは党に無実を訴えるため、事件の経過を回想し、党と議論の応酬を展開する。したがって『モーゼル』は、いま行われている裁判に、過去のできごとがしばしば介入する仕組みになっている。

1920年代初頭、革命軍と反革命軍がせめぎあうロシアのヴィテブスクという町で、Aは革命軍側の死刑執行人として革命の敵を次々と処刑する。この処刑行為は残虐だが必然的でもある。なぜなら共産主義の実現のため、つまり平等で平和な社会を築くために、敵を殺し、膠着した戦況を打破せねばならないからだ。Aも処刑の任務を指示する党もこの必然性を座右の銘としている。何度も現れるスローガンはこの処刑の意義を正当化している。

このコンテキストと語のイメージとの接点からスローガンのメタファーの暗示内容が想像されよう。⁽⁶⁾ 革命の殺戮が漂うコンテキストを背景にして、唐突に現れる「草」という語のイメージがメタファー成立の鍵を握っている。まず「草」という語をそれに類似する別の意味に置き換える必要がある。なぜならスローガンの字義「草を刈る」や「それを緑に保つ」はコンテキストにはそぐわないからである。コンテキストに適した「草」という語の転義は以下のようなプロセスになる。鮮やかな緑を保つ「草」はそのイメージから「生き活きとした自然」という意味に移行し、さらに「自然」という範疇から「草」と同類である「人間」という意味に到達する。

このプロセスを経てメタファーの暗示内容が明らかにされる。それは「『人間』を生かすためには『人間』を処刑せねばならぬ」という意味を暗示しているのである。スローガンのメタファーでは、語のイメージとコンテキストの接点がぴたりと合わさっている。この意味でそれは伝統的の修辞方法に則していると言えよう。

ここで重要なのは、今明らかにされたスローガンの暗示内容と、Aや党が理解する内容とのあいだに相違が生じていることである。Aも党も殺人そのものを正当化しているわけではない。「人間」を殺すのは殺人罪である。革命の「敵」を殺すのが必然的だと容認しているのである。だがこの必然性に鑑みるとスローガンの暗示内容が異なってくる。つまり「『人間』を生かすためには『敵』を殺さねばならぬ」という解釈になり、先の解釈における「人間—人間」の組み合わせが「人間—敵」に変わっていることになる。Aが処刑の任務を遂行できたあいだは、「人間—敵」の組み合わせでスローガンを解釈していたのである。

ところが任務を遂行し始めてから七日目、Aに転機がおとずれる。反革命的行為を犯したとはいえ、搾取されてきた労働者をも銃殺せねばならなかった。その直前、Aの「指と引き金との間に疑いが生じた。」⁽⁷⁾ この労働者たちの罪は、本来の敵の場合と異なり銃殺刑に値しないのではないか、という疑念である。今やAはスローガンの矛盾に気付く。それは、「人間」が革命の達成された理想社会で生きられるために「人間」を殺すという矛盾である。疑いの矛先はスローガンのメタファーにも向けられる。スローガンをメタファーとして理解するのに、Aは「草」という語と「草」を示す代名詞「それ(es)」を、それぞれ「敵」、「人間」と別々に分けて置き換えていたからである。もし「草」を「敵」と置き換えるのなら、「敵」には「草」でなく、「雑草(Unkraut)」という語をメタファーとして用いるべきではなかったのか。処刑の矛盾に気付くことにより、Aは始めてメタファーを正しく理解したのである。

しかし七日目の時点ではAは処刑の任務を放擲できなかった。Aは革命を推進する考えに希望をもっていたからである。しかしAの前任者Bも同

じ境遇でスローガンの意味に納得しなくなり、任務を遂行せず、革命の敵を逃がしたかどで後任のA自身に処刑されている。任務を遂行できなければ、Aも革命の敵として処刑されることになる。したがって七日目ではスローガンの矛盾を容認せざるをえなかった。だがAの容認的姿勢は十日目に破綻する。

革命の日々の糧が／革命の敵の死であることを知りつつ、草をまだ刈り
とりねばならぬ／それを緑に保つために、ということを知りつつ
私はこのスローガンを三日目の朝には忘れていなかった
七日目の朝でも忘れていなかった。しかし十日目の朝に
私にはそのスローガンがわからなくなった。殺人につぐ殺人
そして私のリボルバーの前に立ち、顔を採石場に向けている
第三者はみな無罪なのかもしれない⁽⁸⁾

Aは、反革命の罪と直接には無関係の「第三者」を、「無罪」と考えるようになる。Bと同様にAはスローガンの意味をもはや咀嚼することはない。しかしBのように任務を拒否するわけにはいかない。Aに残された居場所は手とりボルバーの間の「裂け目」しかない。

私のリボルバーの前に人間がいることを知ることもなく
私 手とりボルバー、指と引き金の間
私 私の意識のなかの裂け目、我々の前線の裂け目⁽⁹⁾

この引用にもメタファーが用いられている。「意識のなかの裂け目(Lücke)」である。Aはスローガンの矛盾を悟った以上、それに耐えきれず、自身の理性分別を「裂け目」という無意識の領域に逃避させるほかないのである。その結果Aは自分の銃口を向けた先にいる人間が敵なのか味方なのかを差別することなく乱射する殺人マシンと化す。マシン化の余波はメタファー解釈の正誤を識別していたAの言語能力にまで押し寄せ

る。意識の裂け目から発せられる声はもはや言葉ではない。任務を指示していた党が言語能力の麻痺したAの様子を次のように語る。

我々は彼のわめき声を聞いた。そして我々の命令によらずに
彼がしでかしたことを見た、そして彼は叫ぶのを止めなかった
人間を食い尽くす人間の声で叫ぶのを⁽¹⁰⁾

Aの叫びはわめき声にしか聞こえず、自分が陥った矛盾を伝える言葉は党に伝わらない。したがって党の側からすれば、革命のスローガンを理解せずに処刑する者はもはや革命の一員ではなく、殺人マシンにほかならない。Aは軍事裁判で死刑を宣告され、自分の処刑命令をみずから下すのである。

ここで留意すべき点は、人間を生かすために人間を殺すという矛盾だけではない。東西冷戦構造が蟠距していた時代では、東側においては革命の理念を達成するには同胞の犠牲を強いられるのも必然的であった点も、ミュラーは強調している。つまりスローガンのメタファーでいえば、誤読により解釈された「人間を生かすために敵を殺す」という論理も必然的なのである。Aは、現実の矛盾とスローガンの意味の矛盾に気付くものの、結果として殺人マシンになりさがる点で、革命の「敵」という烙印を押されるのもやむをえない。ミュラーの歴史哲学観によれば、Aのような犠牲ぬきでは進歩や変革はありえない。『モーゼル』の原註でミュラーは演じる者たちにこの必然性を大文字体で諭す。

なにかが生ずるためにはなにかが消滅せねばならない 希望の最初の姿は恐怖であり新しさの最初の姿は驚愕である⁽¹¹⁾

「なにかが生ずるためには」Aを消滅せねばならない。Aの犠牲は非業の死だけでなく、歴史的必然性でもあると作者は認ざるをえない。そしてミュラーはAの犠牲を個人、歴史の両面から照射し、両者がいかに乖離してい

るかを、先述の演じる者たちに学んでもらいたいと考えているのである。この内容上の乖離は、スローガンのメタファーを解説する際に生じた2つの見解の対立と密接に関連していることを、次節で検討してみよう。

2.

第1節では個人と歴史の乖離という問題に、つまり内容上の問題と、メタファー解説の正誤から生じた解釈を絡めてみた。その絡み具合がいささか複雑になっていたため、ここでは絡み合った綾をほぐす作業にとりかかり、メタファーが作品内でどんな機能を担っているかを、探りあててみたい。そこで内容上の乖離と、メタファー解説の際に生じた対立との関係を整理し、図式化してみよう。

内容上の問題	メタファーの解説
①「人間」を生きかすために「敵」を殺さねばならない正当性 (歴史上の視点)	I. スローガンのメタファーを誤読する
↓	↓
対 立	関 係
②「人間」を生きかすために「人間」を殺さねばならない矛盾 (個人の視点)	II. スローガンのメタファーを正しく読む
↓	↓
③マシーン化(無差別な射殺)	III. マシーン化(言語能力の麻痺)

Aが①(歴史)と②(個人/主体)との乖離に耐えきれず③にいたるプロセスの意味、問題を観客たちに演技を通じて実体験させる目的はすでに述べた。ミュラーの「教育劇」研究において、この目的ゆえにミュラーがブレヒトの「教育劇」以上に理不尽な二項対立を描くのだと指摘する向きが強い。⁽¹²⁾しかしここで瞠目すべきことは、Aが革命のための処刑に対してたどったプロセス(①→②→③)は、メタファーに対してたどったプロセス(I→II→III)と軌を一にしている点である。念のために後者のプロセスを詳細に追ってみると以下ようになる。

I. Aはスローガンのメタファーを理解しているつもりだった。しかしそれはスローガンにある「es」という人称代名詞をそれが暗示していない「敵」と置き換える拡大解釈であった。(『人間』を生かすためには『敵』を処刑せねばならぬ)

II. 「es」をそれが暗示する語「人間」に置き換えなおすことにより、Aはメタファーを正しく解釈した。(『人間』を生かすためには『人間』を処刑せねばならぬ)しかし党がメタファーをIの場合のような誤解をしている限り、Aの正しい解釈は党の解釈と背馳する。党との対立は致命的である。だがメタファーの誤読には得心がいかない。真実への追求と死への恐怖とのはざま(Lücke)に陥る。

III. Aははざまに堪えきれずわめき声をあげる。メタファー解釈の正誤など問題ではないかのように。

軌を一にすると、この場合、作品内容において重要な対立関係(①⇔②)が、メタファー解読プロセス、つまりテキストのメタレベルにおいての対立関係(I⇔II)に反映されていることを意味する。『モーゼル』という「教育劇」にとって不可欠な要素、二項対立は、単に内容レベルだけに表れるのではない。テキストのメタレベルにも隠されている。二項対立をこのような二重構造に変える役割を担っているのが、スローガンのメタファーなのである。このメタファーは、正しい解釈(II)と拡大解釈(I)の双方を同時にひきおこす。そして双方の解釈とも『モーゼル』では必然的であり、互いに対立し合う。必然的でありながら、同時に対立し合うという、微妙な関係にある二つの解釈を含む点が、『モーゼル』のメタファーを特異に、かつ斬新にさせているのである。

このように、ミュラーがブレヒトの「教育劇」の批判的に継承した事実、二項対立を内容の点で尖鋭化したことだけでなく、メタテキストのレベルでも二項対立の構造を敷設したことをも意味している。だからこそ、ブレヒトと異なり、ミュラーは「教育劇」でレトリックを多用したのであ

る。

3.

『モーゼル』に舞台参加し、Aの台詞を語った観客は、Aの境遇に深く憐憫の情を感じるであろう。しかしミュラーのその後の作品を知る観客なら、Aの境遇に共鳴するどころか、「明日はわが身」と嘆息するのではないか。マシン化したAのように、メタファー解釈の正誤を識別できなくなるようなはざまに陥る自分を嘆きながら。じっさい、『モーゼル』以後、つまり1970年代以降に執筆されたミュラーの戯曲は依然にもまして観客泣かせの難解な代物になる。そこでは解説し難いメタファーが横溢しているのである。それらの作品は一つを除き「教育劇」とは称されていない。観客は、舞台参加を強いられず、客席に着き、舞台上のできごとを傍観できる。だが聞こえてくる台詞が難解なメタファーの洪水なのである。相変わらず観客は締め出されたままであると言えそうだ。しかも今度はホールのドアの向こう側へである。

マシン化（言語能力の麻痺化）したメタファーは、その後どのように変化したのだろうか。この問いに、まず作者自身が答えている。1989年のベルリン壁崩壊の数カ月前、ミュラーはポストモダンをテーマとする対談のなかで次のような発言をしている。

私はものごとを知れば知るほど、理解できなくなったり、理解しがたくなってしまふ。(中略) だから〔テキスト〕を書く行為もますます理論から逃れていってしまう。つまりますますメタファーに頼らざるを得なくなる。しかもメタファーは作者より賢いので、私自身にさえ読解できないし、その必要などあるのだろうか。ひょっとしたら5年後にわかるかもしれない。⁽¹³⁾

80年代のミュラーはどうやら自分さえ読解できないようなメタファーを書き連ねているらしい。この発言はミュラー独特の大气焰ともとれるが、

メタファーに関しては正鵠を射る発言である。ミュラー後期の演劇テキストにおけるメタファーを分析してみると、

1. 字義どおりの意味と暗示する意味が同時に存在するメタファー
2. 語のイメージから恣意的に複数の連想が可能になるメタファー
3. ミュラー独自の歴史観からかすかな暗示が読みとれるメタファー
4. ほとんど暗示内容がないメタファーらしき表現

に大別されると筆者⁽¹⁴⁾は考えている。本論はこれらの特徴を詳細に論ずる場ではない。ここでは『モーゼル』のスローガンと対比できる、同種のスローガンを組上にのせるにとどめたい。『モーゼル』のスローガンと同じ表現がミュラーの別の作品にも登場するのである。両者の比較から『モーゼル』以後の作品におけるメタファーの特徴がいくらか明らかになる。

BRUCHSTÜCK FÜR LUIGI NONO ルイジ・ノーノに捧げる断章

DAS GRAS NOCH	まだ草を
MÜSSEN WIR	我々は
AUSREISSEN DAMIT	刈りとらねばならぬ
ES GRÜN BLEIBT	草を緑に保つために
In Auschwitz	アウシュヴィッツにて
Die Nagelspur	釘の癍痕が
Mann über Frau	男 女の上に
Über Kind	子供の上に
Die zerbrochenen Gesänge	砕け散った歌声
Der Kirchenchor	機関銃からなる
Der Maschinengewehre	教会合唱団

Gesang	引き裂かれた声帯で
Der zerschnittenen	マルシユアスが
Stimmbänder Marsyas	アポロンへめがけて歌う
Gegen Apoll	歌声
Im Steinbruch der Völker	市民の採石場にて
Das Fleisch der Instrumente	楽器たちの肉体
Welt ohne Hammer und Nagel	ハンマーと釘のない世界は
Unerhört ⁽¹⁵⁾	前代未聞だ

この引用は演劇テキストからではない。1985年にミュラーが作曲家ルイジ・ノーノに献辞した詩である。一瞥してわかるように詩の冒頭が『モーゼル』のスローガンに相当する。『モーゼル』の場合と異なるのは、メタファーの語のイメージから恣意的に複数の解釈が引き出されうる点である。それは先に挙げた後期ミュラーにおけるメタファーの特徴の第2番目にあたる。多くのハイナー・ミュラー論を発表してきたゲーニア・シュルツは詩の冒頭のメタファーが『モーゼル』のメタファーより解釈しがたくなっていると指摘している。その際まずシュルツは、詩のスローガンが大文字体であり、改行により分断されている点を次のように解説する。「文の流れが淀んでしまう。まるで字義どおりの意味がもはやまったく不可能になったように。例えば「我々」とは誰なのだろうか？ 機関銃からなる教会合唱団が語っているのだろうか？ それとも作者やこの断章を捧げられた人物、作曲家といった（集合体？／詩的？）主語であろうか？ それとも私たち読者を指すのだろうか？〔大文字体により〕どの語も強調され、〔分断化により〕互いの関連が欠けているので、このような様々な読みが次々と可能になってしまう。」⁽¹⁶⁾ さらにシュルツは「様々な読み」のなかから二つの解釈を抽出する。一つは『モーゼル』と同じコミュニズム、とりわけ

スターリニズムの暴力を暗示するとの解釈である。詩の後半部の「ハンマーと釘」は社会主義の象徴で、旧ソビエトの国旗であった「ハンマーと鎌」のもじりであろう。「市民の採石場」や「機関銃」という語は『モーゼル』の処刑場を想像させる。二つ目の解釈はナチズムの残虐性との関連である。それは詩の第二連からうかがえる。そこではユダヤ人の強制収容所で名高いアウシュヴィッツで拷問を受けたと思われる人たちが描写されている。

興味深いことに、シュルツはメタファーの暗示内容を上記の二つの視点から説く際、『モーゼル』のメタファーで確認した解読のプロセスとは異なるプロセスをたどっている。シュルツはまず「草が繁った (Gras ist gewachsen.)」という表現は「忘れ去る」を意味することに触れ、「忘却の草を刈らねばならぬ、『フロイトの〕 エス』という不特定の主体が生き延びるように」という解釈をする。⁽¹⁷⁾ もちろん忘れ去った内容は革命の罪とナチスの強制収容所についてである。『モーゼル』のAが無意識の状態に陥り、マシン化したために処刑されたことを思い出してみよう。「 Kommunismus (あるいはファシズム) に過小評価された無意識の主体を救済せんがために歴史の暴力を忘れるな」という警鐘としてメタファーは解釈されているのである。このようにシュルツによるメタファーの暗示内容、解読プロセスは『モーゼル』の場合と微妙に異なっている。もっとも顕著な相違は、シュルツがコンテクストに距離をおいてメタファーをより大胆に解釈している点である。「草」を「忘却の草」と解釈し、さらに、「草」の代名詞「es」をフロイトの「エス」と解釈するプロセスでは詩のコンテクストが斟酌されていない。「草」という語とその指示代名詞「es」を別々に解釈したことはAや党がスローガンを拡大解釈した状況と同じである。だからといってシュルツの解釈は決して間違いではない。「草」を「忘却の草」と解したのは「語」のイメージの範囲内で妥当になされており、「es」を無意識の「エス」と解したのも、同じメタファーが用いられている作品に精通した上での試みである。メタファーが暗示する意味をコンテクストに縛られず様々な可能性から引き出しているのである。

必ずしもコンテクストに縛られず、語のイメージや作者、文学、歴史な

ど博物誌的知の財産からメタファーを解釈するプロセスは難解な現代詩で
の場合と同じである。だからこそシュルツは演劇テキストでなく、詩で上
述のような解釈を試みたのであろう。ミュラー後期の演劇テキストの多く
は複雑、支離滅裂、難解な点において現代詩に匹敵するようになる。こう
したミュラーの文体上の変遷をたどるのに、『モーゼル』におけるメタファー
としてのスローガンが後にどのようなメタファーとして再度用いられた
のかを検証するのは意味のないことではない。そしてミュラーの文体上
の変遷のなかで『モーゼル』のメタファーは次のように位置づけられよう。
このメタファーは、ノーノに捧げられた詩のメタファーと異なり、語のイ
メージとコンテキストが照会したところで解釈される伝統的なメタファー
である。しかし同時にAや党を誤読させる語群の組み合わせやコンテキ
ストをはらんでもいる。この誤解を生じさせる事実が伝統的なメタファーか
ら逸脱しつつあることを示している。『モーゼル』の後に執筆された作品で
のメタファーは、伝統的な解釈のプロセスからみて、誤読に近い大胆な試
みをも許容するにいたった。この意味で『モーゼル』のメタファーはハイ
ナー・ミュラーの後の文体上の変遷をも暗示する分水嶺なのである。

註

- (1) Heiner Müller: Mauser. In: Mauser. Berlin 1977, S. 69.
- (2) Müller: Viv(r)e la contradiction! Interview mit Jacques Poulet, in: France Nouvelle v. 29. 1. 1979, S. 45f.
- (3) 例えば, Genia Schluz: Heiner Müller. Stuttgart 1980, 109f. または Georg Wieghaus: Zwischen Auftrag und Verrat. Werk und Ästhetik Heiner Müllers. Frankfurt am Main 1984, S. 172-179. を参照。
- (4) Bertolt Brecht: Zu: „Die Maßnahme” In: Werke. Bd. 24, Frankfurt am Main 1991, S. 100.
- (5) スローガンは『モーゼル』の S. 55. (2回), S. 57., S. 58., S. 59., S. 61., S. 65., S. 68. にそれぞれ表現されている。
- (6) ハラルト・ヴァインリヒはメタファーの成立条件として、語がもつイメージとその語が属するコンテキストの重要性を詳説している。Harald Weinrich: Sprache in Texten. Stuttgart 1976, S. 295-313. (翻訳) 『言語とテキスト』(協阪豊・他訳) 紀伊国屋書店 1984, 337~360頁

- (7) Müller : Mauser. S. 60.
- (8) Müller : a. a. O. S. 61.
- (9) Müller : a. a. O. S. 63.
- (10) Müller : a. a. O. S. 64.
- (11) Müller : a. a. O. S. 68f.
- (12) 註 3 の文献参照。
- (13) Müller/Robert Weimann : Gleichzeitigkeit und Repräsentation. Ein Gespräch. In : Postmoderne—globale Differenz. Hrsg. von Robert Weimann/Hans Ulrich Gumbrecht unter Mitarbeit von Benno Wagner. Frankfurt am Main 1991, S. 186.
- (14) 4点挙げたうち、第1点目の特徴を示すメタファーが1977年に発表された作品『ハムレットマシーン』に顕著に表れている。拙稿『DIE TEXT-MASCHINE — Zur Rhetorik in der "Hamletmaschine" von Heiner Müller—』参照。慶応義塾大学独文学研究室『研究年報』第12号所収1995年151～165頁
- (15) Müller : BRUCHSTÜCK FÜR LUIGI NONO. In : Gedichte. Berlin 1992, S. 79.
- (16) Schulz : Die Kunst des Bruchstücks. Über ein Gedicht von Heiner Müller. In : Jahrbuch zur Literatur in der DDR. Bd. 7. Spiele und Spiegelungen von Schrecken und Tod. Zum Werk von Heiner Müller. Hrsg. von Paul Gerhard Klussmann/Heinrich Mohr. Bonn 1990, S. 159.
- (17) Schulz : a. a. O. S. 160.